

# 日本記者クラブ会報

第162号  
1983年  
8月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
プレスセンタービル9F 電話100  
◎ 社団法人 日本記者クラブ  
電話 五〇三一二七二一(代)

## 特色のあるクラブに

### 施設運営委が初会合

新設の当クラブ施設運営委員会の初会合が七月二十六日夕刻から開かれた。この委員会ではクラブの各種施設の管理・運営ならびに各種サービスに関する事項について審議することとなった。貸室業務、食堂、

バー、ラウンジ関係のことや、備えつけの新聞、雑誌、図書および複写サービスなど内容が多岐にわたるため、まず既存の施設ならびにその利用の現状につき、事務局が用意した資料に基づいて総検討することから

はじめた。また各委員がクラブ運営の実情を把握するため、会議室での書類上の討議ののち、レストランで会食して夜の食堂利用状況を見ながら懇談をつづけた。

当クラブの位置が東京でも一等地にあり、しかも施設が豪華で、世界でも類をみないほど立派であることに異論はないが、歴史が浅いせいいかこれといった特色がまだ身についていないきらいがあり、「去つてから望郷の念にかられるようなクラブ」

江尻進氏(日本新聞協会顧問)は七月二十二日、日本記者クラブ賞基金として百万円を寄贈した。同氏は

かった新聞界への感謝の微意」として、同協会創立三十七年の記念日を期してこの申し出を行った。なお、

### 江尻氏 クラブ賞に百万円

本年六月の日本新聞協会総会で専務理事を辞し顧問となったが、第一線から退いた機会に「多年恩顧にあず

代から当クラブの設立に尽力し、創立後は理事を勤めてきた。(写真左・江尻氏)

にしたいという発言もあった。なお各委員はクラブ施設の利用方法についてのぼう大な資料を夏休みの宿題として持ち帰り、九月下旬に予定される第二回の委員会から、各種サービスの改善についての具体案を練ることとなった。

#### 施設運営委員会

委員長 小林淳宏(時事通信社取締役経理担当)

委員 梅本洋一(朝日新聞東京本社編集局次長)

委員 高橋昭二(日本経済新聞社総務局長)

委員 庭植(にわとこ) 咲雄(日本テレビ放送網報道制作部長)

委員 広淵升彦(全国朝日放送解説委員)

委員 宮地進吾(日本新聞協会総務部長)

委員 山崎英祐(個人会員)

#### 八月一日現在の会員状況

法人会員	一四四社
基本会員	六二九人
個人会員	一、〇八六
法人・個人賛助会員	五八社
特別賛助会員	一七五人
名誉会員	七三人
計	二〇二社 一、九七五人



## 新シリーズ研究会始まる

いまほどソ連について多く語られ、書かれている時はありません。が、ソ連という国の輪郭はおぼろげながら分かっていても、いまひとつ肝心なところがよく分からない、という意見をしばしば耳にします。

そうした声に、多少ともお答えできるシリーズにしたい、というのが私たち幹事の気持ちです。研究会実施にあたっては、次のような原則を立てました。

第一は、できるだけ実証的に、こつこつと資料を集めてソ連研究をやっておられる方々、あるいは、外交関係や貿易、文化交流など実務を通じてソ連とのかかわり合いの経験を持つ方々を講師に招くこと。

これは逆にいうと、特定の考え方に固まった主張や、荒っぽい推論は排除したいということです。またアメリカなど外国のソ連研究をそのまま移入したような安易な議論も避けたいということです。

## ソ 連

第二は、与えられた一時間半ないし二時間のうち、講師の話は半分位にして、質疑応答の時間をできるだけ長くすること。これは、会員の皆さまから「いまひとつ、よく分からない点」の質問をどんどん講師につけていただき、研究会をむしろ討論の場にしていきたいと考えたからです。

第一回目は、アンドロポフ政権の安定度を、その人事から細かく分析していただきました。このあと「ソ連の民衆はアンドロポフ政権をどう見ているか」「ソ連経済は、軍事力強化にどこまで耐えられるか」「軍隊の実情はどうなっているのか」「SSS 20、バックファイアとシーレーン問題」「ソ連相手の商売の実態」「ソ連と東欧」「日本にとってのソ連」などを、学者はじめ外務省や防衛庁の関係者、商社マンにも聞いてみたいと思っています。

このシリーズ研究会は、伊藤光彦（毎日）、水野堯（TBS）、森本良男（読売）の三委員が担当しますのでご協力を。  
（森本）

「エグゾセって、いったい何だ」  
——昨年五月、フォークランド紛争の火の手が燃えさかっていた最中、目の前に突然現われた兵器に、私たちはど肝を抜かれた。

核軍備、武器援助、軍事予算、ミサイル、原潜といった言葉がニュースに登場しない日はないというのに、一部の専門家を除いて、私たちはその中身についての初歩的な知識すら持ち合わせていないのではあるまいか。日本記者クラブの企画委員の間で、こんな意見が出始めたのは昨年のことだった。

企画委員会では、この二年間、通称「猫にも分かる新技術シリーズ」の研究を続け、好評を博した。だが、ここで取り上げたエレクトロニクス、光通信、遺伝子工学、複合材料など、最近の目を見張るばかりの技術進歩も、裏を返せば、軍事利用をまぬがれ得ない運命にあるのではないか。

新しい技術は、人類の歴史を振り返ってみても、絶えず平和利用と軍事利用の両刃の剣ではなかっただろうか。だとすれば、その実態を知る

## 軍事技術

ことは、少なくともジャーナリストにとって必要なことではあるまいか——六月に発足した今期の企画委員会の初会合で「軍事技術シリーズ」を取り上げることが決まった背景には、こうした議論の積み重ねがあった。

だが、実際にどういう形で研究会を開くかとなると、建前ほどには簡単でないことが分かってきた。担当グループの高野洋（NHK）、武藤慧（全国朝日放送）、石山四郎（個人）、本島宏（朝日）の四委員が悩んだのは①戦略、戦術と兵器の技術面とのからみ合い②毎回のテーマの区分の仕方③適切な講師の人選の難しさ、などだ。

ともかく、目に見えやすい区分で、基礎知識を分かりやすく、戦略、戦術とのからみは必要最小限にとどめて、スタートを切ろう、あとは走りながら考えよう、ということになりました。ご支援、ご協力を。  
（本島）



減税、減税というが「減税」ってどういうことか——という疑問から話は始まった。

「税」を「減」らすことが減税だが、その「税」とは、国の税収の総額のことか、所得税なら所得税という特定の税目の税収のことか。それとも、税収ではなくて、たとえば税率を下げたり、控除を増やしたりといった、税制上の減税措置が問題なのか——。

参院選挙前に与野党が合意した、五十八年（度？）中の「大幅減税」と、いま政府の税制調査会が討議している所得税減税とは、どうも中身が違ふようだ。また、大蔵省などが考えていることと、臨調答申がいった「増税なき財政再建」とも、同じようで違ふ。

私たちが日夜、報道し、解説し、論評している「減税問題」というのは、実は、そのように、えたいの知れないものなのである。その「えたい」を確かめよう。それも平面的ではなく立体的、体系的に勉強し、単純な賛否論ではなく各様の立場を理解しながら問題意識

## 減税問題

を広げ、抽象論でも感覚論でもなく実証的な数字にもとづいた考察を深めてゆく——というのが、このシリーズ研究会のねらいである。

第一回は、すぐれた税学者で政府税調の会長代理をつとめている木下和夫・阪大名誉教授から、日本の税制の特徴を国際比較、時系列的な比較の上で話してもらった。第二回は

「サラリーマン新党」の受けとめた減税問題、減税意識を聞く。

以降、月一回ないし二回のペースで計六、七名の講師を招くつもりでいる。税と財政との表裏の関係も考えたい。行革との関連でもいろいろ聞きたい。徴税の立場も知りたい。税とマクロ経済との関連、税と生活実感との問題などにも、考えを及ぼしたい。

このシリーズ研究会は石丸和人（山形新）、有馬真喜子（個人）、広瀬一郎（東京）の三委員が担当。税を知る人も知らない人もこぞって参加のほどを——。

（広瀬）

「同時不況下の日本経済」というテーマで、さる一月、スタートしたマクロ経済・シリーズ研究会は、村上泰亮東大教授の「二〇世紀システム」の崩壊——新保守主義の処方箋は有効か」（六月）が一応の総括という形になりました。

この間、あたかも出口のないトンネルに入ったような状態にあった世界経済にとつて、二つの明るい材料——アメリカの景気回復と原油の値下げ——が出てきました。

が、この二つが、果たして世界不況からの脱出にうまく結びついていくかどうか、という点については、なお、期待と不安が交錯している、というのが現状のように思われます。そこで、九月から「世界経済の課題」（仮題）のテーマで研究会を再開しよう、と、いま、幹事の鈴木幸夫（テレビ東京）と私、平田真巳（共同）が相談しているところです。

「同時不況下の日本経済」は、まづ「景気見通し」について四人のエコノミスト（宮崎勇大和証券経済研究所理事長、鈴木淑夫日本銀行金融研究所副所長、西村功住友銀行常務、中村孝士東京経済大教授）に順次ご登場願ったあと、鳴沢宏英東京銀行常任参与と鈴木秀雄野村証券顧問に「国際金融不安」について話していただいた。このあと、吉富勝経済企画庁総括主任研究官の「米国の実験と世界経済」で前半を締めくくっていただいた。

## 世界経済の課題

後半は「軍事支出と経済成長」の関係を中心とする田中直毅国民経済研究協会研究部副部長と福島康人防衛研究所研究部第五研究室長の分析に次いで、「原油値下げの背景と影響」（石油評論家の市川真紀夫氏と矢島鈞次東京工業大名誉教授）について勉強したあと、村上教授の総括で締めくくったわけです。

再開シリーズは「アメリカの景気回復はほんものか」をイントロダクションにして、国際通貨制度問題など、いろいろな角度からアプローチしていきたい、と思っています。

再開シリーズは「アメリカの景気回復はほんものか」をイントロダクションにして、国際通貨制度問題など、いろいろな角度からアプローチしていきたい、と思っています。

（平田）

企画委員会から



## とっておきの話

## 小説の夕ネ

青木



彰

「とっておき」というほどではないが、好きな話である。

松本清張さんに「黒い福音」という作品がある。昭和三十四年三月、東京・杉並でBOACのステュワーデス武川知子さんが頸を絞められて殺された。その後の捜査で、ベルギー人のベルメルシュ神父が有力容疑者として浮かぶが、神父は警視庁の取り調べ中に、突然帰国し、事件は迷宮入りしてしまう。

「神に仕える神父が……」という意外性、麻薬密輸がからむという黒い噂、それと国際的な反響の大きさに「海外逃亡」を黙認せざるを得なかった当局の弱腰などから、当時、大きな話題になった「ス

チュワーデス殺人事件」を題材にしたものである。

松本さんは、この事件を「反権力」の鋭いペンで、彫りの深い、みごとに推理小説に仕立て上げているのだが、実は、この作品の「産婆役」をつとめたのが、当時サンケイ社会部の遊軍で事件の担当キャップだったS君である。デスクの私もちょっと加担している。

## 美人記者の来訪

その頃、中央公論社にMさんという婦人記者がいた。東大出で、若くして美人の彼女に頼まれると、どんなに気難しい執筆者でもイヤとはいえないという伝説があった。

そのMさんが、あるとき私を訪ねてきて「こんど『週刊ウロン』を出すにあたって松本さんに小説を書いてもらおうんですけど、いい題材がなくて困っている。なにか面白いこ

とないかしら」という。彼女の窮状を聞いてはオトコたる者知恵を出さざるを得ない。考え抜いたあげく「スチュワーデス殺人事件はどうだろう」とすすめた。喫茶店の片隅でS君を交え「この事件には、いかに面白いドラマが秘められているか」について、コーヒーがさめるのも忘れて説明した記憶がある。

Mさんの報告を聞いて松本さんも乗り気になり、S君のレクチャーが始まった。こうして「黒い福音」は誕生した。

## NHKの「日本の素顔」

小説では、S新聞社会部の佐野記者が活躍する。これがS君である。

その佐野記者がある夜、珍しく早く帰宅し、食事のあと、ぼんやりテレビのドキュメンタリー番組「現代の表情」を見ていて、飛び上がるくらいがある。この夜は「不良外人」がテーマで、最後のところで日本に巣喰う不良外人の写真付き一覧表が写しだされる。

「カメラは、それらの不良外人の顔を次々に移動させて、最後に或る人物の顔に停止した。そこには、美男の若い外人がにこやかな表情で写っている。

「この外人は、トルベック（筆者注、ベ神父の小説中の名前）という名であります。……目下ステュワーデス殺しの容疑者として、捜査の対象になっている者であります」

佐野は、その解説の声と写真に飛び上った。女房が何かいったが耳に入らなかった。

佐野は跳ね起きると、猛烈な勢いで洋服に着替えた。女房が叫んだが、彼の方が血相を変えていた。NHKが四月十二日の夜放映した「日本の素顔」を自宅で見



スチュワーデス殺人事件



被害者の武川知子さん

びっくりして飛び出したのは、実際に私である。たしかS君は、日曜日だというのに相変わらず「夜回り」をしていた。もちろん各社の担当記者も驚いたはずである。NHKの担当記者もその中に含まれていた。

というのも、S君ははじめ各社の担当記者は、事件発生から約一月を経過して大きなカベにぶつかっていた。捜査当局がベ神父をどこまでクロとみているか、つかみきれなかったからである。

それが、すでに要注意人物として入管事務所に、こっそり手配済

みになっていたのだ。驚かないほうが不思議だろう。「日本の素顔」のカメラマンのケガの功名だった。この夜以来、各社の取材合戦が再び活発になったのは当然である。

部分的な記憶を除き、当時の各社の報道合戦の全体像は、ほとんどピンボケしている。間違っていたら恐縮だが、各社とも優劣をつけ難かったと思う。一番肝心な部分を「日本の素顔」に出し抜かれたぐらいだからだ。その混戦の中で、S君はかなり頑張ったといえる。ベ神父と被害者が原宿にあるKホテルで「休息」していた事実を抜いた。ベ神父には致命傷だった。

角川版の文庫本の末尾の解説で小松伸六氏がこう述べている。

「……第二部は伏線となっていた第一部の終わりにみ

えるトルベックの異常な行動が、実は殺人事件と関係があることを、ロクさん（藤沢六郎）という刑事や新聞記者の佐野によって解明されてゆく。こんど再読して、私には、第二部の方が、第一部よりはるかにすぐれているように思われた。……いきもつかせぬ面白さである」

当然だと思う。第二部には、S君の汗がしみた事実の重味が沈んでいるからである。

二本のジョニ赤

そのS君は、自らの体験を何回かに分け、洗いざらい松本さんに話をしたようだ。そして、最後にジョニ赤を二本抱えて意気揚々と社に戻ってきた。当時のジョニ赤は貴重である。居合わせた連中の手がのびてアツという間にカラになった。

「黒い福音」は、いまま清張ファンに読みつがれ、文庫本だけで二十九版を重ねているという。あるとき酔うほどに、S君とこんな冗談話になった。

「ああ、人間、才能の有る無しで

こうも違うものか。あのとき君は、ジョニ赤二本で大喜びしていたが、松本さんは君の話をもとにごっそり印税を稼いだんだ」

「なにいつてんだ。鼻の下を長くしてMさんに、詳しく話せ、話せといったのはあんたじゃないか。ジョニ赤だつてずいぶん飲んだはずだぜ」

「それにしても惜しかったな」「違うと思うよ。新聞記者というものはね、事件が好きだから、面白いから夢中で追いかけるのさ。あのことなんかどうだっていいんだ。あの事件は実に楽しかったぜ。そ、そうじゃないかね」

S君の横顔が、この時ほど輝いてみえたことはなかった。いまだに、S君は私の最も大切な友人の一人である。

あおき あきら氏略歴 一九二六年生まれ。五十七歳。四九年、サンケイ新聞社入社。教養部長、社会部長を経て六五年、論説委員。七一年から大阪本社、東京本社、各編集局長を務め、七七年、フジ新聞社代表取締役社長に。七八年退任。現在、筑波大学教授。



# ソ連のサマンサちゃん

## ワーキングプレス

米国の十一歳の少女が両親と一緒にソ連で夏休みを過ごした。さほど珍しくもない話題だが、ソ連の新聞、テレビは連日のように、この少女とソ連の子供たちとの交流を報道し続けた。

サマンサ・スミスちゃんがことし初め、米メーン州の自宅から、ソ連のアンドロポフ書記長に手紙を書き「ソ連は戦争しないといながら、どうして核兵器をたくさんもっているの」と尋ねた。これが「ソ連が平和を愛していることをじかにみてごらん」と夏休みに招待したという次第だが、七月四日からおよそ二週間のソ連滞在中、とうとうサマンサちゃんとアンドロポフ書記長の対面は実現せず、ソ連の平和宣伝効果も今一つの結果に終わった。

サマンサちゃんが手紙をだした時期は、アンドロポフ書記長が欧州中距離核戦力削減交渉(INF)で新提案をだし

た直後で、ソ連としては平和攻勢、欧州の反核運動の盛り上げへと外交戦術を駆使しはじめたころにあたり、INFが夏休みで休会する中継ぎの手段として利用しようとしたわけだ。

純真な少女を「平和の使者」にしたてあげようという作戦は、西側のマスコミを十二分に計算に入れたもので、歓迎攻めにあつてすっかりソ連が気に入ったサマンサちゃんとア

### どんでん返しのないミステリー

瀬川清茂

(共同通信社モスクワ特派員)

ンドロポフ書記長がニコリ笑って握手しながら「戦争はしないよ」とでも約束すれば、大いに大向こうに受けたかもしれない。

ところが、どうもソ連側はこの筋書きを読み誤ったようだ。なにしろサマンサちゃんは十一歳。黒海沿岸のピオネール・キャンプで準備万端を整えたソ連の「優等生」たちと遊び、大いにバカンスを楽しんだものの、米國を批判したり、ソ連を賛美

したりはしてくれない。

「ソ連もすてきだけど、住むのは米國がいいわ」「ソ連の子供たちが戦争を嫌っていることがよくわかったわ」「わたしが魔法使いになつたら、真っ先に地球上の核兵器をなくしてしまおう」といった調子で、あまりにも率直で、ソ連だけをほめてはくれない。

つきそってきた両親も表だった発言を全くせず、貴賓扱いの好遇ぶりには、いたく感謝してみせただけだった。

ソ連の新聞報道も当初は「平和の使者」ぶりを表に押し出していたが、途中からもつぱらソ連の子供

たちとのなかよしぶりに力を入れ、政治的な意味をうすめてしまった。

当初は十八日か、十九日に予定されていた「サマンサ・アンドロポフ会



仲良しになったナターシャ・キリシーナちゃん(左)と黒海の浜辺で(写真提供・AP=共同通信)

談”が実現しなかった表向き理由は、カダル・ハンガリー第一書記の訪ソの時期とぶつかったからだ、ということになっているが、本当の理由は、サマンサちゃんのこの率直さだったのかもしれない。結果的にはしりすばみの感じ、熱心に報道していた米國の一部テレビ関係者は「どんでん返しのないミステリーだ」とガックリしていた。しかし、面白い話題の少ないソ連で、演出がうまくないとはいえ、こうしたドラマを作ろうとするのは、やはりアンドロポフ流にはちがいない。

少なくともブレジネフ時代には、一般の市民や子供が個人として表に出ることはなかったし、そんな小わざを使おうという気持ちも態勢もなかったのだから。



# マイナス10%シーリング

ワーキングプレス

夜が白々と明け始めた七月十二日の早朝五時。大蔵省二階の大居室前で一斉にカメラのフラッシュがたかれる。五十九年度予算シーリングの最大の焦点、防衛費をめぐる竹下蔵相と谷川防衛庁長官との二回目の閣僚折衝。前日午後竹下・谷川会談の仕切り直しである。

その間、十三時間余り。財研(大蔵省記者クラブ)各社は、防衛庁、官邸など関係の記者クラブ担当と連絡をとりながら、大臣室、主計局、財研の間を「廊下とんび」でかけずり回った。それは、年末の政府予算案決定前夜を思わせる光景だった。

財政再建をお題目にした今回の「原則一〇%マイナスシーリング」によって、財研記者は一年に二度、予算取材のヤマ場を迎えることになった。お世辞にもうれいしいとは言えないお中元(シーリング)とお歳暮(政府予算案)が大蔵省から届くためだ。

防衛費は、この早朝会談でもまともならず、結局、十二日午前十時からシーリング閣議直前に決着という極めて異例な事態となった。大蔵省首脳自らが「まさかシーリング設定で徹夜になるとは……」と、ため息混じりにつぶやいた。

「原則一〇%マイナス」の掛け声も、防衛費の突出(本年度比六・八%増)をはじめ政府開発援助、エネルギー対策など例外的に伸びを認

## 予算取材「夏の陣」

河津市三

(東京新聞 経済部)

めた特別増加枠に打ち消された。この結果、国債費と地方交付税交付金を除いた政策的支出である一般歳出全体のシーリングは一〇%マイナスどころか、本年度に比べ一%増加。

「徹底した歳出削減による財政再建」が政府の金看板のはずなのに、との疑問を抱きながら、一睡もしていない目をこすりつつ夕刊用に五十九年度予算シーリング決定の記事を書く。

ことしは、二月から四月上旬まで開かれた衆参の予算委員会が終了するのを待って、早くも来年度予算の取材が始まった。かつてのシーリングは二五%増、一三・五%増など、まさに歳出の伸びの天井(シーリング)、ひとつの目安に過ぎなかった。実質的な予算取材は八月末に各省庁から出される概算要求からスタートしたという。

こと予算に関しては、大蔵省主計局の役人ともども、財研記者も年末の政府予算案にターゲットを絞り、十一、十二月に馬力をかける「季節労働者」を自負していたとか。

それが財政再建元年と名付けられた五十七年度予算シーリングを境にガラリ一変した。一般歳出の伸び率を原則ゼロとする「ゼロシーリング」が導入されたためだ。その後は五十八年度五%、五十九年度一〇%のマイナスシーリングが設定され、予算取材も四月から七月にひとヤマ、秋から年末にかけてひとヤマと、ほぼ年間を通じて主計局を中心に大

蔵省内を歩き回る羽目となった。大詰めになると、くる日もくる日も役人との禅問答が続く。昨年、ことしと幸か不幸か二度のマイナスシーリングの取材を担当した素直な感想は、年末の政府予算案の取材に比べ、初夏の日差しをあびるせいか、シーリングに より一層熱が入ったように思う。シーリングの時点で緊縮予算の青写真ができて上がり、個別の歳出項目についてもおおよそのデッサンが浮かぶ。それだけに、年末の取材は時として、気の抜けたビルミたいになってしまう。



明け方の竹下・谷川の閣僚折衝(写真提供・東京新聞)



免田さんが“自由”になった日 ワーキングプレス

強盗殺人犯として死刑判決を受け、再審裁判で無罪を勝ちとった免田事件の元被告・免田栄さん(五七)はいま、三十四年ぶりに自由の身をかみしめ、徐々に社会復帰への地ならしをしている。

七月十五日、熊本地裁八代支部での再審判決は無罪と同時に即日釈放という、わずか一日の中にわが国裁判史上でも初めての劇的なドラマを展開して見せた。歴史の一瞬というのはいかようなことを言うのだろうか。その手応えはまだ余韻として続いている。

四十年代以降、熊本は大きな裁判モノが続き、各紙とも司法取材には力を入れてきた。水俣病の民事、刑事訴訟を筆頭に日本一と言われた無限連鎖講・ネズミ講の脱税、資金取り戻し……。

大取材陣を組む裁判は何度かあったが、免田再審判決はそれらを上回った。本紙でも支局からの動員を含め約三十人の記者を投入、かつてない

態勢となった。八代に集まった全国の新聞、テレビ記者、フリーライターは約五百人。どうしても場数を踏んでいない地方記者にとって、高まる緊張感と圧迫感は想像を確実に超えた。

「無罪判決」は審理経過から予想されていたが、判決間近になって慌ただしくなったのが、免田さんの「身柄問題」である。無罪判決が出ても、原審の確定刑が持つ「拘置力」

## “腰縄なし”で釈放読む

荒い牧邦三

(熊本日日新聞社 社会部)

は失効しないため、再審判決が確定するまで身柄釈放はない、というのが法解釈上の建前であった。

そんな中で流れてくる「無罪即日釈放」の情報。法務省と最高検察庁が協議を始めたらしいと言う。これには正直言って困った。両省庁に電話で取材できる類のものではない。ふだんからこれらのニュース・ソースと接触が持てない悩みであった。手当たり次第に日弁連、弁護団に

電話攻勢をかけ、刑事訴訟の学者に見解を質した。また、共同通信の司法担当記者と電話で意見交換し、情報を受けた。これには大いに助けられ、判決前日には即日釈放の取材態勢を新たに用意できた。準備が八割の裁判取材で、どうやら「当日」を迎える態勢に滑り込んだという感じであった。

しかし、即日釈放の可能性は判決のその朝になっても五分五分だった。各紙とも弁護団、支援者の周囲に張りついて懸命だ。無罪判決が出て判決内容の吟味よりそちらの方が急務だったからである。

「拘置支所内の荷物がまとめ上げられている」「トラックの手配は済んでいる」「ホテルの予約が入っている」。全てが釈放の情報ばかりの中で、なお一部に強く悲観論があったのは言うまでもない。

ただポイントは置いていた。昼休みの休廷時に被告に手錠をかけるかどうか、である。この読みは当たった。腰縄もつけず控え室に戻った免

田被告をみて、これは釈放だな、と確信、並行して安原美穂検事総長の含みある会見談話が入って来た。その時点で、本紙三十人の記者チームは「釈放あり」の取材態勢へガラリと身を向き変えた。

閉廷後、裁判長は傍聴人、取材記者を全員廷外に出した。検察側はその直後釈放指揮書を執行、免田さんはその瞬間、晴れて自由人となったのだ。この間、取材記者は裁判長が免田さんにおびを入れていと直感した。再審の持つ重さ、その結果からしても当然だったろう。しかし結局、それはなかったことになっている。釈放されてからの「免田さん追跡劇」は周知の通り賑やかで、年内は続きそうだ。



もみくちやにされ、法廷を出る免田さん(写真提供・熊日)



## 第32回全米ケーブル大会

第三十二回全米ケーブル大会(NCTA)が開かれたのは、六月。場所はテキサス州のヒューストンである。

二十万平方フィートというおそろしく広い会場に、今年はおよそ三六〇社が出品したという。CATV普及率が三〇%を超えたアメリカならではの、大きなスケールである。

この大会、商談が大きな目的の一つとなっており、ローカルのCATVオペレーターが、今後どういふ番組を自社の施設にとり入れるか、設備計画をどう立てるかなどの調査、交渉に訪れるのだという。

このため会場の各ブースには、華やかなデコレーションが作られ、何とか人目をひくうと必死である。パラボラで受信したニュースを一〇〇もの画面で見せて勢いを誇示する二四時間ニュース局、バニー・ガールを揃え、客と記念写真を撮らせて気を引く成人専門局、ケーブル敷設用車両のゴンドラに客を乗せ、高い

天井に届きそうになるまでアームを伸ばして製品の優秀さを示すメーカーなど、様々なデモンストレーションがくり広げられた。

今年には日本からの参加者が目立った。一説によると六〇〇人にも達し、現地では日本人向けのセミナーも催されたという。私も含め、熱心にパンフレットを集め写真を撮るといったのが平均的日本人見学者像であるが、某氏にいわせると、商談に結びつか

### 競争から生き残りの時代へ

竹馬伸朗

(東京放送 企画調査局総合開発部)

ない研究熱心なだけの我々は余り歓迎されないとのこと。

ところで、アメリカのCATVで最近当たっているもの一つにMTVというロック音楽の専門局がある。これはレコード会社が作るプロモーション用の凝ったビデオを無料で借りて来て(貸す側も宣伝になるので損はない)、それを二四時間流し、合間にCMをいれるというまさにアイデア賞ものの専門局で、短期

間に一、二〇〇万世帯の客をつかんだ。また、最近始まったC&W音楽の専門局も、今年中に一、〇〇〇万世帯を超す見込みと、関係者の鼻息は荒い。

しかし、景気のいい話ばかりではない。MTVを真似して、早くも数局が同じ趣向を取り入れるという。レコード会社も無料で貸すことを渋り出し、有料の意向もあるらしい。当たり前である。多くの番組供給

会社ができればできるほど、番組ソフトは不足して来て奪い合いになる。アメリカのCATVでは、白黒映画や文字サー

ビスだけのチャンネルも随分見た。現在アメリカでは、映画専門局のベイ・ケーブルが番組獲得にしのぎを削っている。こうした中で最大手のHBOは、映画番組の独占化を狙って、劇場映画を制作する段階で参入しようとしている。HBOは最早ガリバーで、ベイ・ケーブルの代名詞になってしまった。

番組供給会社は多いが、利益を計上しているのはわずか三社であると

いう現実には、アメリカのCATVが激しい競争の時代から次第に生き残り競争の時期に移りつつあることをうかがわせている。

日本とアメリカでは国情も、メディア環境も違う。しかし視聴者の要求が多様化している状況や、番組がすべてであることに本質的な変化はあるまい。



派手な宣伝合戦—バニー・ガールもお目みえの専門局(写真提供・田口大会員)



## 東京支社訪問

十一日目までひとり全勝を続けていた大関・隆の里（青森県出身）に土がつき、優勝争いもつれてきた七月十五日。銀座五丁目ニュー東京ビル五階の東奥日報支社長室。

柿木原政則支社長と和田満郎編集部長の両会員に話をきく。

現在、東京支社は編集三人、営業六人、総務二人、それに柿木原支社長の十二人。宮古記者と菅原記者は名古屋場所の取材で不在。両記者は引き継ぎのため、四月から取材行動を共にしている。

「相撲の世界は特殊ですから引き継ぎに時間がかかるんですよ。八月からは編集は私と菅原記者の二人になります。去年から六場所全部を東京の編集部でカバーすることになりましたね」

青森県出身の力士は現在、幕下が三人、十両一人に幕内五人（隆の里、出羽花、東洋、魁輝、旭富士）。当然のことながらスポーツ面で相撲

の占める比重は大きい。「がんばれ隆の里」の連載の他に、『あすなる棧敷』で有望な郷土出身の幕下力士を紹介している。

なんとと言っても青森は相撲熱の高いところ、「うっかりヘタな記事は書けませんよ。読者の目は肥えていますからね」と和田部長は言う。

毎年、この時期は米価の決定や予算編成がらみで、地元から多くの陳情団が上京する。「これも支社とし

### 隆の里の「綱とり」を追い

### 六場所全てをカバー

てていいいにカバーしなくてはいけない重要な仕事です」と柿木原支社長。県の東京事務所、議員会館、陳情団の宿泊先と、和田部長は駆け回ることになる。

また、これから秋にかけては、地元出身者関係の展覧会も欠かせない取材対象となる。

「困るのが同窓会なんです」と和田部長は苦笑する。年間一〇〇通以上の招待状が支社へ送られてくる

が、とても全部は回れない。

「地元の人たちは、あの人はどうしているか」に興味があるんです……」

それで極力、時間をさいて東京で活躍する青森人を一人でも多く紹介するため、飛び回ることになる。そして、夕刊一面の青森県出身者をたずねる『あすなる随談』に、週に二、三回は東京支社から送稿する。

ところで、弘前出身で共同OBの坂田二郎会員が、同紙夕刊に「回想

・マスコミ50年」二六九回の連載をさる四月に完了した。それがサイマル出版会から『ペン』は剣よりも——昭和史を追っ

て50年』のタイトルで間もなく出版される。「サイマル出版の田村勝夫社長も青森県人なんです」と柿木原支社長。

常に青森県人としての視点で問題を考え、地元の人びとの目となり耳となろうという姿勢が、両氏の話の中にうかがえる。

「ウチは今年の十二月で九五周年なんです。その関連では、『伝えていこう青森の心』という企画ものを

二月から五月まで連載しました」東奥日報は東奥義塾を弘前に設立し、欧米文化の移入につとめた菊地九郎氏の主唱で明治二十一年十二月六日に創刊号を発行している。

支社長室には青函トンネル先進導坑開通を記念して作られた置物——開通地点の小石を人工樹脂で固めたもの——が置かれていた。青函トンネルをはじめ、新青森空港、むつ小川原の石油基地、東北新幹線延長と大きな事業が青森県には目白押し。いずれも中央がらみの問題だけに、東京支社の役割はますます重要になる。（河野）

※隆の里は七月二十日、第五九代横綱に昇進した。



夕刊用の送稿を終え、ちょっと一息の支社編集部



### 第72回会員資格委員会

昭和58年7月12日(火)  
日本記者クラブ小会議室

八月一日付の入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 細川、赤松、滝沢、吉田、亀山、上野、山田、長竹の各委員。

### 第43回会報委員会

昭和58年7月13日(水)  
日本記者クラブ大会議室

七月号について意見交換の後、八月号と九月号の編集方針を協議した。

八月号、九月号の『とっておきの話』は、青木彰、中川順の両氏に執筆依頼することにし、九月号の『ワーキングプレス』は、クサマンサちゃん訪ソと、財研記者と予算編成をとり上げることにした。

『東京支社訪問』は八月に東奥日報社、九月に岐阜日日新聞社を訪ねる。出席 深谷委員長。桂、井出、斎藤の各委員。

### 第103回企画委員会

昭和58年7月8日(金)  
日本記者クラブ大会議室

行事報告の後、新しく始めるシリーズ研究会について、それぞれの小委員会か

ら基本方針が説明され、了承された。(二、三ページ参照)

八月の行事としては、二日にシュルターデンマーク首相の会見、五日にシリーズ研究会『新技術』の最終回(講師 江崎玲於奈氏 テーマ「日本の技術のあげ底」を行うことを決めた。また、二十回にわたった研究会『新技術』の最終回の司会を、同研究会の幹事をつとめた村野賢哉氏にお願いすることにした。

出席 藤村委員長。本島、森本、一木、友田、広瀬、米、片岡、石丸、高野、水野、藤川、泉田、武藤、鈴木、有馬、石山、中沢の各委員。

### 第1回施設運営委員会

昭和58年7月26日(火)  
日本記者クラブ小会議室

事務局からクラブ施設概要と施設運営委員会の役割(第64回理事会決定)について説明した。

とりあえず「クラブ利用に関するお願い」のうちの施設関係の内容を検討し直す作業に取り組むことになり、次回以降の具体的検討のため事務局原案が配布、説明された。

出席 小林委員長。庭植、広瀬、山崎の各委員。

### ゴルフの会

第三十七回ゴルフ会は七月二十二日、相模原ゴルフクラブに会員十九人が参加して行われた。

梅雨あけの夏空が期待されたものの、あいにくの曇天で湿っぽい一日となった。しかし競技は、久々に参加した本田路威会員(朝日イブ)が終始快調に飛ばし、NET5アンダーの好スコアで他を圧して優勝した。二位以下は次のとおり。  
二位・米谷健一郎(D) NET77、三位・近浪廣(法賛) 77、BB・嶋袋浩(琉球)、BG・近浪廣、NP・米谷健一郎、広岡知男(D)。

この日は、毎日新聞OBで相模原ゴルフクラブ顧問の高田市太郎さんが特別参加。高田さんは当年とって八十六歳、体

重四十一キロの細い体で、十歳年下の広岡さんとドライバーの飛ばし合いをしていささかもひけをとらなかつたとか。その体力、氣力に賛嘆の声がしきりでありました。

次回は十月二十八日(金)、山梨県都留Cで行われます。多数ご参加を!

### 囲碁の会

七月二十三日の例会は十七人が参加、総対局数三十六局、次の各氏が優秀な成績をあげました。

村上孝止五段(協会)、宮沢昭二郎三段(日本海事)、庭植咲雄三段(日本テレビ、初参加)、白井敏之二段(共同)、河田穂二段(会友・ABC)。規定により宮沢三段は四段に昇段しました。次回は九月二十四日(土)。



▽七月十日、原書房から「黄色い雨」ある日、あなたを襲う化学戦の恐怖」(S・シーグレイブ著)を翻訳出版しました。

テレビ朝日 小秋元 龍

▽日ソ交渉以来、二十七年ぶりのモスクワ訪問。変わりに変わった一例——ホテルのレストランなど、市民の高根の花だったのが、午後七時ごろから超

▽八月下旬に日本証券新聞社から「株の兆し 乾坤一擲ノ兆候で儲ける(秘作戦)」を出版します。兆候分析による独自の方法を展開してみました。

個人D 小針寛司



先月のクラブゲスト

土屋正忠 武蔵野市市長



「四千万円の退職金」引き下げ運動の波にのって市長選勝利。四十一歳。市職員として

九年、市議として八年、市政への市民要求の変化を肌で知っている。保育園、道路、プールをつくれといった受益型要求から、ムダをやめて減税すべしへの変化。

市の仕事量を減らし、減税してゆつくり町づくりをとの陳情は、四十年代の革新が火をつけた「市民参加」のより徹底した形だという。コスト計算の導入と適切な組織管理で、成熟した市民の要求にこたえ、草の根民主主義を育てたいと抱負を。「七日(木) 記者会見 司会 藤岡進企画委員 出席 四三人」

真藤 恒 日本電信電話公社総裁



六月五日から十日まで八日まで訪米。ワシントンでリーグ

ン大統領と会談、資料調達セミナーにも出席。

INS (高度情報通信システム) に取り組む電々公社の基本姿勢を説明した。電気通信分野で進む激しい技術革新に対応するためにも、INSの本格的普及のための料金体系といったことを考えても、いま経営形態の問題を検討することが重要と語る。

電々のソフト参入については、「現在のデータ通信サービスは特例で、公衆電気通信法の改正時には見直されるべきもの」との考えを示した。「二日(火) 昼食会 司会 藤川鶴也企画委員 出席 七三人」

西村文夫 国際問題研究所主任研究員



昨年十一月十二日に、アンドロポフが党中央委員会書記長に就任以来のソ連の人事を綿密にフォロー。軍、警察、外務

関係を核としたアンドロポフ人脈が、この半年で着実にブレジネフ派にかわり要所を押え、すでにアンドロポフ体制は確立したとの評価。ポスト・アンドロポフは、「ゴルバチョフ、ロマーノフ、ルイシコフ」。「二日(火) 研究会「ソ連その実態と意図」(一) 司会 水野亮企画委員 出席 九三人」

ケンブル・フレイザー CBI 会長



現在、ダンロップ・ホールディングス社長。八二年二月から英国産業連盟

(CBI) 会長。

「ダンロップのゴルフボールは使っているが、ロールスロイスは無理。欧州の要求は、日本の産業の一部スクラップダウンまで進むのか」の質問に、「引き続きDDHボールのご使用を。ぜひラウンドごとにロストボールを。なぐさめになるかどうか、英国でも多くの人々にとってロールスロイスはタカネの花」。

「日本は、成功の故の悩みをかかえている」として、七〇年前の英国の教訓を続ける。「偉大な輸出国は同時に偉大な輸入国でなければならない」。「三日(水) 記者会見 司会 石丸和人企画委員 通訳 蜂屋美季子 出席 六四人」

O・G・ラムズドルフ 西独経済相

会見前日の夕刻には、「ウイリアムズバードサミット及び第六回UNCTAD



後の世界経済」と標題をつけた日、英、独のテキストが事務局へ。

大臣は世界経済について、最悪状態は脱したが、米国の高金利が足かせになっており、本格的回復には時間がかかるとの見通しを示した。

ドル、円、マルクのターゲットゾーン方式には、「為替相場安定の助けにならない。ファンダメンタルズが適切でなければダメ」。「三日(水) 記者会見 司会 伊藤光彦企画委員 通訳 大倉敬子 出席 六七人」

J・H・ピリントン ウッドロー・ウィルソン 国際学術研究所長



モスクワ、北京訪問からの帰途。米国におけるソ連歴史の研究者として著名。アンドロ

ポフは早くも地歩を固めたと見る。短期的には、スターリン時代の影響を受けた最後の指導者アンドロポフは、重要事項先送りの変革を避けた手法をとっている。しかし、中、長期の観点からみれば、「ソ連は重要な変革期にある」として、「ソ連のアイデンティティー探求」を核に話を展開。「二日(月) 記者会見 司会 森本良男企画委員 通訳 佐藤敬子 出席 五五人」



先月のクラブゲスト



モハマッド・ジアウル・ハク  
パキスタン大統領

冒頭の大統領のあいさつは、まずアッラーの神、次に日本のプレスを賞賛して、「日本のプレスの分析力と情報の質、量に匹敵するものは多分世界にない」。シコロカラソウオモイマスケと日本語のサービスも質疑応答でもなかなかのステートマンぶり。

質問は①核不拡散条約の署名②アフガニスタンからのソ連軍撤退見通しと対ソ交渉③パキスタン経済。

①については「多くの国々が署名を拒否し、その中に東の隣国も入っている。パキスタンだけに署名を期待するのは公平でない」。②は「ソ連の撤退希望を信じて、これを助けようとしているが、政治的解決には時間が必要」。③には「湾岸産油国の収入減の影響がパキスタン労働者の送金に及ぶのは三年から五年先。イスラム教義ののっとり、搾取の禁止、貧富の格差是正を旨とする」。【二〇日(木)昼食会 司会 新井明理理事長 通訳 米倉淑子 出席 二二人 写真・時事提供】

青木日出雄 評論家



陸軍航空士官学校卒、戦後、電気通信省、航空自衛隊を経て、現在、「航空ジャーナル」主筆。「スペースシャトルの軍事利用」というマスコミの表現は誤り、「あれはもともと軍事目的をもつたもの」として、開発までの経緯を説明。さらに二、〇〇〇個に近い人工衛星(うち約八割が軍事用)の実態を衛星の目的別に整理する。【一九日(火) 研究会「軍事技術」(一) 司会 本島宏企画委員 出席 五人】

木下和夫 政府税制調査会会長代理

主要先進国との対比を中心に、わが国の税制の特徴を説明し、減税問題に言及。課税最低限(現行二百一十五万円)の引き上げ、税率区分の拡大などが、今後政府税調での検討課題になることを示唆した。



特に年収六百万から二千万円の中高年齢に「税痛感」が強いとして、累進税率を緩和する方向を強調。「重税感」という言葉は使わない。【二五日(月)研究会「減税問題」(一) 司会 広瀬一郎企画委員 出席 七八人】

赤松良子 労働省婦人少年局長



七九年、国連での婦人差別撤廃条約の採択の際は、国連公使として、推進のための根回しも。帰国して、

今度は批准のための準備、「採択の時もむずかしかったが、批准に向けての作業も大変」。審議会では、雇用における男女の機会均等確保のための法的整備や女性に対する特別措置の見直しが議論されている。【二八日(木) 記者会見 司会 有馬真喜子企画委員 出席 三四人】

明石 康 国際連合事務局次長

「これまでは一つの規範、ゾルレオンとして国連を見る傾向が強かったが、今後はもう少しさめた目で、相互依存の世界で、日本の利益を増進させる外交展開の場として……」



分担金はソ連を抜いて第二位、上級職員二千人中日本人約百人。「平和維持軍への派遣も、日本でなければつとまらない地域へは……」。【二九日(金) 記者会見 司会 江尻進理事 出席 四七人】



# プロフィール

八月一日付人会の個人D会員、法人賛助会員、特別賛助会員の方がたです。



# 紹介 会合

- 1日▽第11回民教協  
海外研修結団式(テ  
レビ朝日 今井虔一  
会員) 2日▽都市  
問題研究会(木原啓  
吉会員) 5日▽U  
協回線委員会(KB  
S京都 西山純弘会員) 6日▽シル  
クロード懇談会(額賀章友会員)  
▽ロングマイカー エッソ新社長と記  
者との懇談会(エッソ石油 多田正遠  
会員) 7日▽車社会研究会(東京  
茂野豊次会員)▽新聞会員東京支社長  
会懇談会(協会 宮地進吾会員)▽座  
談会「石油の国家備蓄」高橋光男石油  
公団備蓄業務部長、高野子雅宣福井石  
油備蓄株式会社、奥村高久論説委員(日  
本工業 前本勝佑会員)▽ブックガイ  
ド企画報告会(道新 太田俊郎会員)  
8日▽在京九社編集局長会(協会 宝子  
山幸充会員)▽全国新聞社出版協議会臨  
時例会(共同 平田真己会員) 9日▽  
西部社会部長賞受賞パーティー(朝日  
国正武重会員)▽日本エッセイストクラ  
ブ理事会・贈賞式(殿木圭一会員) 11  
日▽選挙取材打ちあげ会(日経 一木  
豊会員) 12日▽二火会(日本農業 木  
村睦会員)▽第六回ASEAN記者研修  
計画歓迎会(協会 阪田秀会員) 13日  
▽東京愛媛クラブ例会(愛媛新 堀定省  
会員)▽座談会 菊地庄次郎日本郵船会  
長、山下勇三井造船会長、大山恵佐日本  
海事新聞社長(日本海事 宮沢昭二郎会  
員)▽きさらぎ会(共同 古谷忠雄会員)  
14日▽障子紙普及会記者発表会(電通P  
R 田中正博会員) 15日▽論説委員O  
Bと現役との懇親会(日経 阪口昭会員)  
▽四〇〇メガ実験結果検討会(協会 佐  
藤耕太会員) 18日▽徳島クラブ・懇親会  
(徳島新 谷田匡会員) 19日▽十七社  
会(熊日 森茂会員)▽小中陽太郎氏欽  
送会(朝日 川名安会員) 20日▽在京  
加盟社部長会(写真記者協会 石渡和夫  
会員) 21日▽民間放送・地方局懇談会  
(民放連 泉長人会員) 22日▽新聞労  
務講座(協会 畔上和也会員)▽在京外  
信部長会(協会 宝子山幸充会員)▽経  
済部OB会(共同 中野正彦会員) 25  
日▽寺田輝介外務省報道課長送別会(時  
事 沖野剛会員)▽荻野さんを励ます会  
(朝日 宮崎幸一会員) 27日▽「サン  
トリー」ミステリー大賞」制作発表(朝日  
放送 長谷部光郎会員) 28日▽全国新  
聞編集者会議(時事 橋本以喜夫会員)  
29日▽大森繁雄、朝日イブニングニ  
ュース社長を励ます会(朝日 木村繁会  
員)▽年間最優秀プロデューサー賞授  
賞パーティー(電通 藤岡和賀夫会員)



エッセイストクラブ賞贈賞式(9日)一時事通信の藤原作  
弥記者(中央)は「聖母病院の友人たち」で受賞





アンドレ・ロス フランス大使  
着任のごあいさつに！

7月4日(月) アンドレ・ロス駐日フランス大使(左)が、着任のあいさつのため、クラブを訪問、新井明新理事長(右)と懇談した。

ハク大統領からの贈り物

七月二十日(水)の昼食会で、新井理事長が記念品として、クラブ特製の蒔絵の万年筆を贈呈したのに対して、ハク大統領からはブロンズ製メダルと銀製飾り盆(十三ペーリ写真参照)がクラブへ贈られました。ブロンズ製メダルにはパキスタン建国の父・モハマッド・ジンナの像がデザインされています。クラブがゲストに贈る記念品は、蒔絵万年筆、シルバール万年筆、カフス・タイピン・セット、ボールペン、シャープペンシルなどです。国賓ゲストには特注の蒔絵万年筆を贈っていますが、富士山をデザインしたものと五重塔に桜をデザインした二種類があります。

宴会、会議室、レストラン

予約は(五〇三)三七六六で！

各会議室の予約、レストランのテーブルリザーブ、料理注文などは、出来るだけ(五〇三)三七六六のクラブ受付直通電話でお願いいたします。

寄贈書

ABC三十年の歩み (社)日本ABC協会  
行政改革 地方の選択 共同通信社編

会員の著書(ご惠贈いただきました)

ハイテック・ロビー戦争 大前正臣  
音羽VS一ツ橋 巨大出版社の研究 田原 洋  
自治用語小辞典 小山善一郎  
サダト暗殺 佐藤紀久夫訳  
惨殺 心神喪失事件 津崎 至  
黄色い雨 小秋元龍訳  
間違いだらけの防衛論 海原 治

ゲスト・カード

イマン・ソエリスノ(イン  
ドネシア 三菱アワード受  
賞者) ヒュー・クラーク (キャンペラ・ナショナル・  
プレス・クラブ)

クラブ訪問者

7月4日/アンドレ・ロス  
フランス大使 7月15日/  
ミール・カレル・ウル・ラーマン(『ジャン』主筆、  
パキスタン)

▲展覧会の招待券▼

左記の展覧会、美術展の招待券をご惠贈いただきました。

'83世界報道写真展(毎日新聞社)  
古代オリエンタル展/フランシス・ベーコン/韓国古  
代文化展(東京新聞)  
岡本太郎展/伝統工芸30年の歩み(朝日新聞社)  
事務局の異動

クラブがプレスセンターへ移転して以来七年間、受  
付を担当していました秋山和子が、結婚のため七月三  
十日で退職しました。

訃報

助川貞三会員(奈良新聞)が七月一日(金)、福島悠  
峰会員(下野新聞社)が七月五日(火)、心不全のため  
逝去されました。謹んで両会員のご冥福をお祈りいた  
します。

八月の行事

25日(木)午後2時~3時30分 シリーズ研究会  
『減税問題』(Ⅱ) 青木茂参議院議員  
クラブ記者会見室

会報委員長 深谷憲一

委員 桂敏一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫  
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二一